

早稲田大学ラグビー蹴球部におけるリーダーシップ
Leadership of Waseda university rugby football club
1K07B009－7 有田隆平

主査 大田章 副査 島田陽一

第一章 緒言

早稲田大学ラグビー蹴球部は日本で5番目に古い歴史をもったチームである。この部は大学の一ラグビー部にとどまることなく、観客動員数や戦術戦・略的などのことから考えても日本において非常に影響力を持ったクラブチームである。そのクラブの主将に第93代主将として筆者は選ばれた。筆者は様々なカテゴリーにおいて主将という役を引き受けてきたが、今回のような歴史あるチームや様々な人間が所属している組織においては初めてのことであった。自らが主将としてどういったリーダーシップを発揮していったら組織がうまく機能していくかについて研究をしていけたら、早稲田大学ラグビー蹴球部はもちろんのこと日本のラグビー界のリーダーシップについて探究できるのではないかと考えた。

第二章 組織とリーダーシップ

リーダーシップを研究していくにあたって、まず大切になることは「組織」についての理解をしておかなくてはならない。リーダーというのは組織が存在していなければ生まれないものである。そして、組織の発生要因をアメリカの経営学者 Chester Barnard の考えをもとに、(1)共通目的(2)貢献意欲(3)コミュニケーションとい位置づけリーダーシップへとつなげていった。リーダーシップについてスポーツに特化することなく、現代までの流れで考えられてきた(1)特性アプローチ(traits approach) (2) 行動アプローチ(Behavioral approach) (3) コンティジェンシー・アプローチ(Contingency Approach) (4)変革型リーダーシップ (Transformational Leadership)、という四つのリーダーシップに対するアプローチ方法を示した。

第三章 ラグビーとリーダーシップ

今回のテーマである早稲田大学ラグビー蹴球部が取り組んでいる競技はラグビーである。ラグビーという競技についてのルールや競技特性を知ることで、他の組織とはどこが違って、どういったことが難しいのかということが明確にする必要があると考えあえてラグビーについて記述した。また、リーダーシップによって大きく変化し1999年度に14年ぶりに大学日本一を達成した慶応義塾大学の例を取り上げた。この節においては、上田昭夫氏がいかにしてリーダーシップを発揮し、就任当初は慶応史上最弱とまで言われた慶応義塾大学を再建していったか

について彼の著者である「慶応ラグビー部『企業』報告。勝てる組織はこう作られた (著) 上田昭夫」を参考文献として探究していった。

第四章 早稲田大学ラグビー蹴球部におけるリーダーシップ

第二章、第三章において考えてきた組織とリーダーシップを参考に、2010年度の早稲田大学ラグビー蹴球部における理想的なリーダーシップとは何かについて考察し研究結果を考え出した。そのなかで「ビジョンの理解と共有」「PM型のリーダーシップ」「民主型リーダーシップとフォロワーの必要性」という三つのキーワードをもとに、具体的な施策をあげながら今後の早稲田大学ラグビー蹴球部のリーダーが取るべきリーダーの形を示した。またこの中で、リーダー以外のフォロワーの重要性についても触れ、組織マネジメントを行っていく中でフォロワーの役割についても触れている。

第五章 今後の課題

最終的にリーダーシップの研究がどういった方向へ進んでいくことがいいのか、この研究自体が正しいかどうかはどのように証明されるのかが書かれている。現在リーダーシップの研究においては、研究者によって様々な意見があり統一性が取られていない。また、早稲田大学ラグビー蹴球部のリーダーシップという問題を今回取り上げたのが実際問題として資料などが非常に少なく新たな分野の研究であったため、なかなか研究自体の情報量が少なかったことが挙げられた。今後このような研究を行っていくにあたって、自らが情報収集をよりおこない、アンケートを取るなどをして研究する必要があるのではないのかと考えている。